

留学の決心

中村元

(東京大学名誉教授
東方学院院長)

外国へ留学生を送るということは、大変なことであ
り、それは政府とか大教団のみのなし得たことである
が、善光寺さまが独立に海外に留学生を送られること
になつたのは、感嘆すべきことである。

まさに今昔の感に堪えない。

今からほほ四十年前には、日本が進駐軍の支配下に
あつたために、外国留学など思いもよらぬことであつ
た。月の世界へ行くようなものであつた。



ただ外国から招待を受けて、しかも外国から資金を
与えられた人々のみが、外国へ出かけることができた。
わたしたちの仲間で、アジア諸国へ留学することが
できた最初の人は、高崎直道君であったと思う。わた
くしはその必要を痛感し、インド大使館と折衝してい
たが、ついに先方のインド政府から留学資金を給せら
れることになった。

喜びのあまり、わたくしは故・宇井伯寿先生を、お
訪ねしたときに報告した。「今度高崎直道君をインドへ
送ることになりました。」

ところが先生は驚いて言われた。——「なにインドへ
送るとな！　それは、容易ならぬことだ。気をつけね
ばならぬ。なになに君はインドへ行つて重病になつた。
なになに君は死んで帰つて來た！　氣をつけい。」

確かに高崎君自身は、容易ならぬことに気づいてい
た。現夫人と婚約中であつたにもかかわらず、結婚を
のばして、昭和一十九年に単身ブーナへおもむいた。
「万ーの場合を慮つて」と言われた。悲壯な覚悟である。

インドの文化都市ブーナでの足かけ四年の研究はみ
ごとに結実した。その学位論文「究竟一乘宝性論の研
究」を、審査員であつたイタリアの碩学トウツチ博士
が高く評価した。その結果、同博士の主宰するイタリ
ア極東中東研究所叢書の一冊として立派に刊行された。
戦後の邦人の大乗仏典の研究が外国文で刊行され、こ
のよう国際的に高い評価を受けた例は、稀である。

その後高崎直道博士が学界の重鎮として諸国の学者
からたよられていることは、周知の事実であるが、そ
れは単なる偶然の所産ではない。覚悟を決めてかかつ
たその態度が実つたのである。

今日は、戦争直後とはすっかり事情が変わつている
ので、一概に言うことはできないが、これから留学す
る人々がただ「遊びに行く」だけのためならば、もは
や何も言つことはない。しかし、近く東大を定年退職
する高崎博士の栄誉と信望にあやかりたいと思うなら
ば、覚悟を決めて精進されむことを期待し、先人の行
実の一端を紹介した次第である。